

# 永遠の失敗者

——イワン・ガヴリロヴィチ・プリジョフ略伝——

鈴木 淳 一

大いなる才能と、多読家、民俗学者、及びロシア文化の歴史家としての独学による幅広い博覧強記的知識を持ちながら、民事裁判所の官僚制という恐ろしき泥濘に投げこまれ、生まれおちた家庭においても、また学問への無限の献身と民衆への愛という彼の人生を意義あるものにした二つの不変の情熱を抱いて世に出ようとする試みにおいても、不幸であった永遠の失敗者（A. H. Веселовский 〈Из ранних лет〉 より）。<sup>1</sup>

\* 以下本論で引用部に対し括弧内にアラビア数字で頁数が付される場合は、И. Г. Прыжов. Очерки, Статьи, Письма, М.-Л., 1934. の頁数とする。

ドストエフスキーの『悪霊』にトルカチェンコという人物が出てくる。ピョートルの組織した「五人組」のメンバーのひとりとして、そこでは紹介されている。

奇妙な男で、年はもう40がらみ、ロシアの民衆、とりわけ詐欺師や強盗に関する膨大な研究で名を知られ、わざと安酒場ばかりうろつきまわり（もっとも、それはたんに民衆研究のためばかりではなかったが）、汚れた衣服、タールをぬたくった長靴、目を細めたざるそうな顔、気取った難解な俗語などを、仲間内でひけらかしていた。〈略〉彼は時折町に姿を見せたが、それは大低職にあぶれた時であった。彼は、鉄道関係の仕事を転々としていたのである。<sup>2</sup>

このトルカチェンコのことを記憶している読者は珍しかろう。スタヴローギン、ヴェルホヴェンスキー父子、シャートフ、キリーロフ——こうした読者の眩暈を誘わずにはいない人物群に比するなら、彼など無に等しい存在でしか

なく、実際小説中でもほとんど何の役割も担っていないかのように見えるからである。だが、「『悪霊』に対して——鈴木) 僕は大いに期待しているが、それは芸術的側面からではなく、傾向的な側面において期待をかけているのです。たとえ芸術性がだめになろうとも……」(1870年3月23日ストラホフ宛)<sup>3</sup> という作家自身の言葉をもし考慮するなら、彼の存在も、何がしかにせよ、注目されて然るべき光を放つだろう。なぜなら、トルカチェンコとは、「文学では珍しい単一人物の単純な反映」<sup>4</sup> であって、「彼の形象中には、原型たる プリジヨフに一致せざるような特徴は、何ひとつ見出せない」<sup>5</sup> からであり、イワン・ガヴリロヴィチ・プリジヨフは、『悪霊』の題材となったネチャーエフ事件及び裁判の主人公のひとりだからである。

プリジヨフ自身が魅力的な人物であり、その文学遺産が独立した研究に十二分に値するものであることは、無論言うまでもない。ただここでは、無名に等しい彼の略伝を紹介するにあたって、有名なドストエフスキーに水先案内人をひきうけてもらったに過ぎない。

## 1

1806年、モスクワ郊外の、犯罪者や行倒れ人といった無縁仏の眠る墓地、それに孤児院や精神病院などのある一画に、パーヴェル一世の未亡人マリヤの名を冠した貧民救済病院が完成する(起工は1803年)。このマリインスカヤ病院は広大な敷地を占め、「中央には美しい柱廊のついた壮大な病院本陳がそびえ、その両翼に配置された傍屋は、主として従業員たちの住居にあてがわれていた」。<sup>6</sup> 1827年9月22日、イワン・ガヴリロヴィチ・プリジヨフが生まれたのは、この従業員のアパートの一室においてである。

父ガヴリール・ザハロヴィチ・プリジヨフは、1793年モスクワから20キロほど離れたスレドニコヴォ(あるいはセレドニコヴォ)村に生まれた解放農奴であったが、1812年8月5日第4歩兵コサック連隊のモスクワ非常後備隊第2大隊に下士官として入隊。入隊後まもなく(8月26日)ポロヂノ村近傍に派遣され、当地での戦闘に参加するとともに、ナポレオン軍のモス

## 永遠の失敗者（鈴木淳一）

クワ撤退に際し、その追討軍の一員として国境を越え、旧ワルシャワ公国まで従軍。1812年を記念して詔勅によって定められた銀メダルを授与。1814年10月15日退役。退役から一年を経た1815年10月15日、どのような経緯がそこに介在したかは不明だが、マリンスカヤ病院に守衛の職を得ている。そして、その二年後の1817年9月3日には、空位となった病院の書記に転任、以後1858年に没するまでの約41年間、実直に（1856年には、長年にわたる瑕瑾なき勤務に対しヴラヂミル勲章第4等を授与され、貴族となる権利を手中にするほどに）書記の職を務めあげることになる。

従って彼は、話は若干それるけれど、マリンスカヤ病院の医師だった作家Φ. M. ドストエフスキーの父ミハイル・アンドレーヴィチと、16年にわたっていわば同僚だったのであり（M. A. ドストエフスキーは、1821年3月21日から1837年6月30日までマリンスカヤ病院に務めている）、彼らの息子たち——イワン・ガヴリロヴィチ・プリジョフとフョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキーも、10年間同じ屋根の下で暮らしたことになる（Φ. M. ドストエフスキーは1821年10月30日生まれ）。医師と書記とでは何ら交流がなかったとしても不思議はなく、同じ病院内で生まれたフョードルの4才違いの弟アンドレイ・ドストエフスキーも、その回想記中の両親の知人について触れた部分で、ガヴリール・ザハロヴィチ・プリジョフの名を挙げていないが、<sup>7</sup> 軍隊生活という共通の経験がほぼ同年令の人間（医師の方が4才年長）を近づけたとしても、それもまた不思議なことではなからう。<sup>8</sup> いずれにしても、書記の息子は、21年の歳月を隔てて医師の息子と同じペトロパヴロフスカヤ要塞に同じ「国事犯」として収監された時、自らの未来の運命を医師の息子の迎ってしまった運命と重ねあわせて、次のように語っている。<sup>9</sup>

私の父は、モスクワのマリンスカヤ病院に勤務していたが、善良なる友人ドストエフスキー医師、即ち故Φ. M. ドストエフスキーの父君（これはプリジョフの誤記で、Φ. M. ドストエフスキーの故父君、でなければならぬ——鈴木）も一緒だった。Φ. M. ドストエフ

スキーのことはほんの少し覚えているが、私は当時まだ6～7才であった。こうして、マリインスカヤ病院からドストエフスキーと私の二人がシベリヤ送りに処される運命にあったのだ。あんなに幸福な病院がまだあるのかどうか、私は知らない。そこでは、犠牲者たる人間たちがばたばたと斃れてゆくのだ。(стр. 11)

『貧しき人々』を処女作とし、酔払の生態に興味を持ち、一連のユローヂヴィを登場させるドストエフスキーと、『聖なるルーシの乞食たち』『ロシヤ民衆の歴史との関連におけるロシヤの居酒屋の歴史』『26人のモスクワの偽予言者、偽ユローヂヴィ、馬鹿女に馬鹿男』を書きあげることになるプリュジョフの最初の出会いに、「貧民院街」の「貧民救済病院」以上に相似しい舞台などあっただろうか。

話を戻そう。

ガヴリール・プリュジョフの就職時の給料は、年俸115ルーブリであった。5年毎に23ルーブリの昇給があったから、イワン・プリュジョフが生まれた頃には161ルーブリになっていたことになる。これは大体同病院の医師ミハイル・ドストエフスキーの三分の一強ぐらいの収入に過ぎず、また医師が個人的に患者を持つことを許され、往診のために御者付馬車を乗り回し、ささやかとはいえ領地さえ購入しえたことを考えるなら、両者にはかなりの経済上の差があった筈である。さらに、アンドレイ・ドストエフスキーに父親にあてがわれたアパートの狭さ、暗さで不平を言う権利があるとしたら、<sup>10</sup> 守衛から書記になった男の住居については容易に察しがつこうというものである。従って、もしもマリインスカヤ貧民救済病院の暗く淀んだ生活環境が、医師の息子 Ф. М. ドストエフスキーに生涯払拭し難い傷痕を残したと主張しうるなら、<sup>11</sup> 別荘地への避暑など夢にも思い浮かべることのできなかった書記の息子についても、同じことが、更に強い調子で言いうるであろう。まして、解放農奴出身の書記の縁者といえ、恐らくそのほとんどが農奴や貧しい農民だったろうから、次のような『告白』に、何の誇張も透し見る必要はないだろう。

私の惨めな少年時代の最初の子守歌は、農奴制下の鞭の魅力に関する親類縁者たちの話であった。生まれたばかりの私が母と一緒に寝ていた寝室には、私のためにミルクが用意されていたが、そのミルクは寒さのために凍ってしまい、私は空腹のために泣いたものだった。私の人生はこうして始まったのである。（стр. 11）

## 2

1848年、書記の息子イワン・プリジョフは、モスクワ第1ギムナーヂヤを卒業する。家庭では碌な教育を受けず、病弱でどもりで、成長などとは無縁だった彼は、しかし、たゆまぬ努力によって、トップクラスの成績を収め、無試験で大学に入学する権利を手に入れたのだった。彼は、恐らく意気揚々と、モスクワ大学文学部へ入学願書を送付したことだろう。だが、願書は無残にも、学生数削減に関する勅令により不許可という通知とともに返送されてくる。不運は時代にあった、時代が悪かったのである。この年、西欧に火の手をあげた革命の余波を恐れる政府は、全土的監視体制の強化に着手し、革命の飛火がもっとも着火しやすい大学は、その第1の標的として狙上に登ったのだった。学生数削減の勅令は勿論、講義の監視、講義要綱の検閲といったように、大学の存在そのものが危機に頻することになったのである。当時ペテルブルク大学教授で検閲官だった B.A. ニキテンコは、1848年について、「西欧の出来事は、サンドイッチ諸島に大パニックをもたらした。〈略〉 サンドイッチ諸島では、考えようとするいかなる素振も、いかなる高潔な衝動も、たとえそれがどんなにひかえめなものであっても、非難され、圧迫と死を運命づけられるのである。〈略〉 学問は顔色を失い、絶命しつつある」と、『日記』に記している。<sup>12</sup>

こうしてプリジョフは、「百万回の逮捕よりも致命的な」（стр. 12）ショックを受けながら、やむなく、学生数削減の勅令の範囲外にあった医学部に入学することになる。しかしそれはたんに学籍を確保するための形式的手続きに過ぎず、彼の出席したのは、文学部と法学部関係の講義ばかりであっ

た。だから、入学後2年もたたぬ1850年の初めには早や、彼の学籍が失われてしまうのも当然の帰結と言えるだろう。ただし彼は、学籍を失ってからも尚一年以上大学生としての生活を続けたし、三年にわたる大学生的生活の後もしばしば大学に出入りしていたのであって、彼が如何にモスクワ大学にいわば内側から精通していたかは、彼の『混乱の時代とモスクワ大学のこそ泥たち』が教えてくれるところである。<sup>13</sup>

ところで、1862年に古代ロシア文学に関する全講義を聴講したとプリージョフ自身が語っている(стр. 12)スラヴィストで神話学者のフョードル・イワノヴィチ・ブスラエフを別にすれば、大学生として送った3年間に彼はどういった人の教えを受けたのだろうか。共鳴=影響という観点に立って確実に指摘しうるのは、オンツプ・マクシモヴィチ・ボジャンスキーとチモフェイ・ニコラエヴィチ・グラノフスキーのふたりである。プリージョフのウクライナへの関心と愛着は、明らかに、ウクライナ出身で、熱狂的ウクライナ信奉者であると同時に傑出したウクライナ学者であった前者から受け継いだものに相違ない。例えば、1868年4月6日のクラエフスキー宛書簡では、『11~18世紀の文学史における小ロシア(南ルーシ)』をボジャンスキー(やその他の人々)の指示に従って執筆したことを明言しているし(стр. 366)、さらにまた、ウクライナの独立を訴える声明書をウクライナ語で書きあげるまでになるところにボジャンスキーの薫陶の深さ強さを見ることができよう。生涯献身的であった妻オリガ・グリゴリエヴナ・マルトスがウクライナ女性であり、プリージョフ自身妻の出自に一種誇りを抱いていたことも付言しておくべきだろう。<sup>14</sup> ドストエフスキーが彼にトルカチェンコというウクライナ名を与えたのも、偶然などでは無論ないであろう。

一方、世界史の教授であり、その講義が大学の壁を越えて社会的現象にまでなつたと言われる40年代の代表的なリベラル派知識人グラノフスキーからは、プリージョフは一体何を学びとったか。それは、端的に言えば恐らく、その後閉塞的状况の中でなす術もなく沈黙を強いられ、時に反動化さえして60年代の急進的ないわゆる「子」の世代に激しく批判される以前の輝

しきリベラリズム，まだ理想の達成を夢み，啓蒙を信じることのできたリベラリズムそのものであった。プルィジョフのグラノフスキーへの言及は少なくないが，そのことをよく伝えてくれるのは『10月4日のモスクワ』中の一節であろう。この論文は，1855年10月4日に他界したグラノフスキーの死後7周年に献じられたものである。

グラノフスキーはちょうどいい時に死んだ。彼は，他の人に場所を譲って死ぬかあるいは第一線から退くかしなければならなかったのだ。彼にはもはや，それまで歩いてきた道を歩き続ける力がなかったからである。グラノフスキーは，それによって我国の啓蒙が始まったあの学問のもっとも純粹にして輝しい代表者であった。この学問の最後の言葉は彼によって発せられ，もはや言うべきことの何もなく，他方面に方向転換するか，それともただぶらぶらと墮落し，自らを銅貨にまで貶め，現在彼の友人たちが行き着いてしまっているような地点に辿り着くか，そのいずれかが避けがたい状況であった。グラノフスキーは死んでしまった。死に臨んで彼は，汚れなき思い出とえもいわれぬ高潔な姿，それに公平に見て崇高な人間的原理の旗印となりうるであろうその名前を残した。（原文改行） 当時はモスクワ大学の全生活がこうした原理の上に成り立っていて，そのために聴講者たちが大きな群をなしていつでもグラノフスキーの教壇を取囲んでいたし，そうしたこと全てが大学の壁の外側で展開していた生活と有機的に結びついていたのであった。グラノフスキーとともに全てが終わりを告げてしまった。生活は違った方向に転進し，大学は生活と絶縁してしまった。

（стр. 218）

もしブスラエフやボジャンスキーの影響が専門分野的なものだったと言えるなら，グラノフスキーのそれは，知的好奇心を支える人間の基本的姿勢，学問と生活の有機的統合を信じる情熱といったようなものだったと呼べるかも知れない。

まだ他にも何人かの名前を挙げることができよう。例えば、19世紀末の高名な哲学者 B. C. ソロヴィヨフの父親である歴史学者 C. M. ソロヴィヨフなどである。

しかし、忘れてならないのは、モスクワ大学は畢竟プリジョフにとって真の学舎ではありえなかった、ということだ。確かに彼は、上述の人々に出会い、そして強い感化を受けた。上述の人々が「歴史」の専門家であったことと、彼の著作の多くが題名の中に「歴史」という一字を含んでいることの間には、やはり何がしかの絆が存在するに違いない。それでも尚、彼の社会的関心と知的探求心とが一体となって開花し、かつ結実するためには、民衆という土壌こそが、フィールド・ワークこそが必要にして不可欠だったのである。「もし大学で学ぶことが許されないのなら、自宅で学ぼう」(стр. 12)——彼の言う「自宅」とは、無論文字通りの意味ではない。図書館や文献保管所といった場所を指すのでもない(ただし、彼はモスクワ大学図書館やペテルブルクの公立図書館などに足繁く通っており、そのブックishな知識は膨大なものであった)。ここで言う「自宅」とは、モスクワの町外れ、モスクワ近傍の村々、地方都市のことに他ならない。そうした場所での工場労働者や農民との直接的な交流こそ、プリジョフの真の学舎となり、彼の著作の支柱となったのである。彼は、民衆の歴史研究に携ろうとする歴史家たちの悲惨な運命を見据えつつ、尚もこう言い放たずにはいない。

私は、ただ考古学的事実のみならず、いつの日か民衆によって流されたあらゆる涙、あらゆる血、あらゆる汗をひとつにまとめあげたかった——まとめあげてそれを算術の許す限りにおいて算定しようと思ったのだ。(стр. 18)

### 3

1852年1月18日、プリジョフはモスクワ民事裁判所の第一課に職を得ている。この就職にあたって彼がその選定の基準としたのは、「楽な務めで



あって、研究しかつ 餓死しない可能性」(стр. 12) を与えてくれること、というものであった。最下等の官位(14等官)しか持たなかった彼は、会計検査官と書記のふたつの職を兼任させられたにも拘らず、年俸168ルーブリ(後に276ルーブリ)しか支給されなかった。それはそもそも取るに足りない金額であったが、「遂にはどんな歴史の教授の所に行ってもめったにお目にかかれぬような歴史文献の図書室を作りあげた」(стр. 12)ほどの本に対する情熱によって、限りなく無に近いものでしかなくなっていたのだった。それでも、好きな事に打ち込む時間だけはたっぷり取ることができ、新聞や雑誌への寄稿にも不自由することはなかったし、ある程度の文学的地歩も、ささやかながら生活の一助となる原稿料も手に入れることができたのである。

裁判所での勤務自体は、言わば餓死防止の一手段に過ぎなかったから、プリュジョフの官吏ぶりはかなり自由奔放に近いものだったらしい。少なくとも、ゴゴリやドストエフスキーの世界に住まう小官吏たちとは違っていらしい。И. А. リンニチェンコが Н. И. ストロジェンコから聞いた話として伝えてくれるプリュジョフの仕事ぶりに、例えばそのことは窺い知ることができるだろう。ストロジェンコは、プリュジョフが彼のシェークスピアに関する公開講座について書いた贅辞的論文の件で、プリュジョフに感謝の意を表するためにその勤務先を訪れたのであった。<sup>15</sup>

初めての正式な訪問のために、Н. И. ストロジェンコは会計検査官である作家の職場に行った。早く着きすぎた彼は、プリュジョフがまだ出勤していないのを知った。彼は座って待っていた。しばらくして下の方でドアがぱたんと鳴った。すると部屋に着席していた人々——会計検査官の部下たち——は、直ちに立ちあがって、二列に整列し、ひとりが帳簿をもってドアの方に進み出た。突然、部屋のドアがけたたましい音をたてて開いたかと思うと、そこに毛皮外套に身を包み、帽子をかぶり、オーバーシューズをはいた上司が姿を現したのだった。その時、先頭に立っていた男は補祭よろしく帳簿を高くさしあげ、低

く太いバスでこう唱えた——『どうぞ天上におわします主なる神が、あなた様の会計検査のお仕事を、いつでも、そしていついつまでも、お忘れになりませんように』——『アミン——と迎えられた方は答えた——おはよう、諸君！』——『どうかあなた様の会計検査のお仕事 がうまくゆきますよう！』——その後上司は、芝居がかった身振りで用務員の手 に毛皮外套を投げやり、机に近ずいていった。机上には既にワイン入りの長首水差しと前菜が用意されており、彼はグラスにワインを並々と注ぎ入れると、それを高く持ちあげてさっきと同じ挨拶をした。そして部下たちが一斉にそれに応えると、ワインを飲みほし、大げさな身振りでこう結んだのだった——『どうぞやってくれたまえ』。そうした光景が、くる日もくる日も繰り返されていたのである。<sup>16</sup>

長々と引用したのは、しかし、たんにプリュジョフの仕事ぶりの非役人的一面を示すためだけではない。「くる日もくる日も繰り返される」この一見さりげない日常の光景に、実は、ふたつの注目すべき事実を穿ち見ることができるからだ。そのひとつは、プリュジョフの飲酒癖である。朝の一杯に始まり、「気に入った居酒屋でバックスと意気投合して」<sup>17</sup>一日を終わる人間だったればこそ、『居酒屋の歴史』<sup>18</sup>は生み出されえたと言ってよからう。ただし無論、「バックスへの熱烈なる跪拝は、当時作家にとってまったく必然的なものと見做されていた」<sup>19</sup>のであって、称賛されるべきは、アルコールに依存せずにはいられない個人的現象を社会的レベルで捉え返すとともに、そこに佇立してしまふことなく、現象を歴史的に掘返してみようとする情熱であることは言うまでもない。

もう一点は、プリュジョフが部下たちと行なう出勤時の儀式そのものである。この儀式がパロディーであるのは誰の目にも明らかである。ここでは福音書が帳簿にとってかわられている。そして、ここでかわされる挨拶が、静粛なる勤行の始まりではなく、一種酒宴の始まりであるかのように演出されていることに留意すれば、この儀式はもう意識的な反宗教的デモンストレー

ジョンだとさえ呼んでさしつかえないだろう。それはまさに、「司祭や修道僧に関する破廉恥な話を何千となく集め」（стр. 13），『アリューシャ・ポポヴィチ』<sup>20</sup> を，さらには『26人のモスクワの（偽）予言者，（偽）ユローヂヴィ……』<sup>21</sup> などを執筆してゆくプリジョフの道行にびたりと符合するものである。

ところで，プリジョフはモスクワ民事裁判所に，同所が1867年に閉鎖されるまで，15年間ずっと勤め続けている。この間彼は，別に現職に満足していた訳では全然なかった。どうにかしてペテルブルクに移り住みたいと考え，ペテルブルクの公立図書館にもぐりこむためにあれこれと画策したり（стр. 22），モスクワの貴族選挙に出たりもするのだが，ことごとく失敗に終わっただけのことである。それにしても，いかに薄給であって，その上本を買い漁ったとはいえ，何故に始終「一文なしです」（1863年クラエフスキー宛。стр. 364）「お茶や砂糖は勿論，パンや薪さえもありません」（1865年クラエフスキー宛。стр. 365）と，出版者に泣きつかねばならなかったのか。「ただパンのためにのみ書いた」（стр. 17）筈の原稿料は，一体何処に消えたのか。その謎の，いささかも知れないが一端は，恐らくプリジョフ自身のディレッタント気質，あるいはプロの作家意識の欠如が担っているように思われる。自作に対する次のような彼の態度は，例えばプロ意識が骨の髄まで浸透した作家ドストエフスキーにはおよそ想像すらしがたいものであろう。

何故か食物が何もなかったので，私は大きな紙やら小さな紙やらに書き散らした乞食に関するメモを集め，糊をとりだしてそれらのメモを貼合せ，といった風にして〈略〉『聖なるロシアの乞食』をつくりあげた。私はその原稿を，ニコリスカヤ街の活版工スミルノフに25ルーブリで売った。彼は2千部かそれ以上刷って，1冊50コペイカで出版した。出版した本は全て売れた。さらにもう一度飢えに襲われた（公務員なのにである！）。今度は，「娯楽」誌に（匿名で）掲載されたユローヂヴィに関する覚え書きを集めた。すると『26人のモスクワのユローヂヴィ』が出来あがった。サラエフに原稿を買ってくれるよ

う頼み、15ルーブリ要求したが、彼は駄目だと言った。10ルーブリでも、5ルーブリでも駄目だと言った。〈略〉それで、いまいましてにかつとなった私は、プレスノフの本屋に行き、原稿を店の番頭ニコライ・バルコフに贈呈した。〈略〉本は、胸くその悪いことに、二千部も刷られ、1冊銀貨1ルーブリで全て売れたが、私はビター一文うけとらなかつた。(стр. 17~18)

無論、しかし、謎が謎たる所以の大半は、他ならぬ検閲にこそあつたと言ふべきである。それは、プリュジョフの知的好奇心と情熱の追究の方向性から見て、不可避的であつた。彼の世に問おうとする作品は、全てのつけから暴露的であり、反体制的だつたからである。例えば彼は、裁判所に務め出してからしばらく、勤務の傍らモスクワ、トヴェーリ、ヴラヂーミルといった県の町や村を旅行し、資料をあれこれと収集するのだが、当時どうしても書きたかつた作品として次の三つを挙げている。——(イ)人間文化の第1の敵としての司祭と修道僧。(ロ)主として民衆の証言に基いた農奴制の歴史。(ハ)ロシアにおける自由の歴史。題名を一見して明らかだらう。これら三作品はそれぞれ、聖職者、地主貴族、政府それ自体への宣戦布告の書として構想されているのだ。中でも(ハ)の場合には、草稿用ノートの表紙のために、ぐるりに鎖、四隅に絞首台、斧、断頭台、枷、鞭、ペトロパヴロフスカヤ要塞をあしらうというデザインを、わざわざ絵を勉強中だつた弟に依頼したほどだから、反体制的姿勢がとりわけ露骨に表明されていたと言えよう。彼はこの作品を初めからいつか「外国で出版しようとの心積り」(стр. 13)でいたが、それはまた(ロ)を「途方もないものとして断念した」(стр. 13)のと同様、『アリョーシャ・ポポヴィチ』という題名の下にまとめあげられた(イ)の構想が検閲で不許可となつたための対抗策に他ならない。いずれにせよ、もともと着手されなかつた(ロ)にしても、一応は完成され、あるいは執筆途上であつたが、遂に陽の目を見ることなくプリュジョフ自身の手で焼却されてしまふ(イ)や(ハ)にしても、検閲の車輪の犠牲であることに変わりはないのである。いきおいプリュジョフは、いわゆる「イソップの言葉」を多用すること

になる。それでも、彼の扱うテーマの焦眉性が出版者たちを危惧させる。

プリュジョフによってやっと発表されたもの全ての、半分は検閲あるいは自分自身の手で削除され、もう半分は片輪にされていた。

(стр. 20)

プリュジョフのこの言葉に、誇張は、恐らく微塵もない。まず発表が先決であって、しかしてその後によりやく原稿料だったのである。

#### 4

「私の仕事の目的は」とプリュジョフは書いている。

私の仕事の目的は、大衆うけすることではまったくなかった。そんなことは考えもしなかった。人気は他の人々に委せていたからだ。私の目的は、もっと複雑にして深遠なものだった。即ち〈略〉民衆の生活の主だった現象の全てについて、ひとつひとつ、存在し始めたその瞬間から今日に到るまでの軌跡をあまさず追究すること、従って国家に初めて、国家が自らの姿を自覚する可能性を与えること、過去及び現在の姿、それに将来あるべき姿を社会学的見地からしっかり見定める可能性を与えること——それが私の目的だった。あえて言わせてもらうなら、こうした大胆な試みは私の能力に見合っているばかりか、部分的には既に実現されたとさえ私は思っている。私の手元には、十分な資料が収集されており、私は既にそれを6巻の大冊（印刷紙にして40～50枚）に分類することができた。

- (イ) 民衆の信仰（文化の始源期、中世、現在における）。
- (ロ) 社会風俗（パンと酒、共同体と同胞、詩と音楽と劇）。
- (ハ) ロシヤ女性の歴史。
- (ニ) ロシヤにおける貧困の歴史。<sup>22</sup>
- (ホ) 分派、異教、分離派。
- (ヘ) 小ロシヤ。（стр. 14）

この巨大なパースペクティブの中を、検閲と戦い、貧困に耐えながら、たゆまぬ前進を続けるプリージョフに、やがて1867年がやってくる。1867年——それはモスクワ民事裁判所が閉鎖され、プリージョフが貧困から赤貧への転落を余儀なくされた年である。

15年の長きに亘って率なく勤めあげ、「文官の職務継続の能力があるとともに、かつ相似しい」と勤務員名簿に記載されたにも拘らず、14等官プリージョフには、如何なる第二の職場も提供されはしなかった。プロの作家として自立できる目処<sup>めど</sup>が立たない以上、月給23ルーブリの消失は彼にとって、まさしく死活問題に他ならなかった。1858年以来丹念に資料を収集し、1863年頃には完成していたと思われる『酒類販売の歴史』を携えて、出版者M.O. ヴォリフのもとを訪れる彼の姿に、赤貧と明日を知れない不安は色濃く滲んでいる。

1867年のことだった。M.O. ヴォリフの本屋に、汚ならしい身なりの、40~45才がらみのぼろをまとった男が入ってきて、大きな文字で書かれたぶ厚い原稿をとりだし、ヴォリフにむかってこう尋ねた——「この『論文』を買って出版しませんか？」(原文改行) ヴォリフはびっくりしながら、その奇妙な「原稿の売り手」を見て、この浮浪者が作者だろうかと怪しみ、原稿は誰のものかと聞いた。「私の作品です——と訪問者は答えた——ロシアにおける居酒屋の歴史が書かれています」(原文改行) 奇妙な人物とともに奇妙なテーマが、ヴォリフの興味をそそった。彼は目を通すために原稿をうけとり、二週間後に返事をする約束をして、風変わりな作家に住所を尋ねた。(原文改行)「住所ですって?——と男は訝し気に言った——それを言うことはできませんね。今日は木賃宿にいますが、明日はたぶんそこを追い出されているでしょうからね」。<sup>23</sup>

モスクワ大学の出版を管理していたM.H. ラヴロフや、「声」紙のクラエフスキーに断われ、言わば断片とでもいったような小論文は発表しえたもの

の、<sup>24</sup> 完全な形での出版のために 1863 年以来保存されてきたこの作品は、こうして赤貧に強いられるままに結局は半分ほどに切り縮められ、『居酒屋の歴史』と改題されて店頭に並ぶことになるのである。

本は二千部刷られ、一冊 2 ルーブリで売られた。だが、驚くなかれ、プリュジョフがヴォリフからうけとった報酬は、印刷紙 1 枚につき 10 ルーブリ、総額にしてたったの 250 ルーブリに過ぎなかったのである。しかもその少なくとも半額は借金の返済として即座に消える運命にあったのである。<sup>25</sup> どんなものであれ、従ってプリュジョフには定職が必要であった。モスクワからペテルブルクへ、ペテルブルクからモスクワへ、彼は奔走する。奔走はするが、すべて徒労だった。文部省に務めようにもコネがなく、地方官庁にもぐりこもうにも、彼の入りこむ隙間は皆無であった。いやまず焦燥が徒労感に拍車をかける。そこに限りない絶望が生じたとしても不思議はない。疲労困憊した彼は、ある日ふと、モスクワのパトリアルシー池に身を投じる。「永遠の失敗者」は、しかし、ここでも失敗する。以後の彼の苦難の生涯を思う時、それを「運良く」と形容すべきかどうか一瞬ためられるが、いずれ彼はすぐさま発見救助されたのであった。ちなみに、彼がこの投身自殺の一件で起訴され、知人たちの口添えで起訴をどうにかとり下げてもらうという後日譚は、「永遠の失敗者」の肩書きに相似しいと言うべきだろうか。

かくしてプリュジョフがどうにかポストを探し当たったのは、民間の鉄道会社だった。1867 年の末のことである。にも拘らず、彼はまもなく退職している。「算術をほとんど知らなかった」(стр. 23) というのが、彼自身の語る理由である。民事裁判所時代の彼の仕事が会計検査だったことから考えて、この理由は一見奇妙に響く。恐らくこの「算術」は、当時の資本主義の経済分野での擡頭、とりわけ鉄道建設部門へのその進出との関連で考えられるべきものだろう。即ちそれは、投機的潤色を施された利潤追求の算術であって、プリュジョフはそうした算術に興味がなかった、あるいはそうした算術に積極的嫌悪を感じていたと解すべきである。その時初めて、先の言葉の前にある「鉄道の仕事は激烈この上なく、異常に複雑な業務が行なわれており、プ

ルィジョフの手を通して毎日何万ルーブリかそれ以上の金が動いていた」(стр. 23)という説明も納得できるだろう。理由はどうあれ、その結果彼は、再びルンペンとなって次のような手紙を書くはめに陥る。

私と妻が耐え忍んでいる極度の貧窮、神様しか知りえぬようなひどい貧窮ただそれだけで、あなたに御面倒おかけしなければならなくなりました。どうか平に御許しのほどを。(原文改行) もしあなたが、私の『[人間の信仰の歴史における] 犬』を、どんな値段でも結構ですから、現金10ルーブリでもいいのです、どこかにうまく売りこむことができますようでしたら、なるべく早く当方にお送り下さい。当地で売りたく思いますので……。 (1868年1月21日, K.H. ベストウ  
ジェフ=リュージン宛。стр. 368)

この書簡のさらに先には、さる小品を同封するので、なんとか売りこんで、売った相手にいくらでも言い値でいいから送るよう頼んでくれといった旨のことも書かれているが、依頼は双方とも受け入れられず、結局プルィジョフは一文も手に入れていない。この間如何なる方法で食いつないだのかわからない。確かなのは、1868年の4月頃には再度鉄道関係の仕事についてということである。ただし今度の仕事は、営業所内の事務ではなく、ヴィテプスクーオーリョールーハリョフーキエフ線の線路監督であった。フィールド・ワークを信条とする彼にとって、この仕事は新資料発見収集の場として大いに魅力あるものだったに違いない。「声」紙の主宰者 A. クラエフスキーへの「旅先からあなたに、出会うものすべてについてお手紙するつもりです。私はまったく新しい世界と出会うことでしょう。〈略〉あなたの新聞を受け取って、そこに私の手紙が掲載されているのを知る限り、私はあなたに4月から12月まで毎日手紙を書き続けることでしょう」(傍点プルィジョフ, 1868年4月6日付。стр. 366)という言葉の中に、彼の可能性に対する期待感は如実に映し出されている。だが、不幸なことに、この旅先からの贈物は、『モスクワからキエフまで』一作を数えるに過ぎない。旅先からの贈物



がこの一作をもって終わりを告げたのは、第一にクラエフスキーが初めからプリュジョフの提案を拒否したためであり、またクラエフスキーと同時に作品の提供を約束していた M. H. カトコフの方は、この作品を「現代史」に紹介してくれたものの、第二作目を勝手に廃棄処分にしてしまった——プリュジョフ自身の言葉で言えば「かっくらってしまった」（стр. 21）——からであった。伝えようとする意欲が発表の場を奪われた時、新世界とのふれあいは突如色あせ、ほとんど無意味なものに見えたのだろうか。定職無くしては明日の食事さえままならぬ我身も顧みず、またしても長く勤めることなく、彼はルンペンの道を選ぶことになる。

「世界中に何すべきことの何もなく、一方家庭は貧困に支配され、妻は何の生活手段も持たずに耐え難いほど困難な状況にあえいでいた」（стр. 23）——その時プリュジョフは一体どのような日々を送っていたのか。次に引く彼の言葉が示唆するのは、理想的には既に十分革命的であった彼が、行動的レベルにおいても革命的になってゆく姿、即ち真の革命家となってゆく姿ではなかろうか。

その時プリュジョフには、モスクワの半分は知人だったに拘らず、街全体に近い人はひとりもいなかった。だから彼は、民衆の所に行こうと決心した。「みんなといれば何も恐くない」からだ。それ以来毎日、用事があるとか、仕事に行くとか言って妻をだまし、街の一番はずれの工場労働者たちが大勢住んでいる地域まで出かけていったのだった。〈略〉そしてそこで安食堂に立寄り、新聞を読んだり、お茶を飲んだり、工場労働者たちとだべったりしたのだった。〈略〉彼は何故か彼らの仲間のように思われたのだった。〈略〉そうしたおしゃべりの中から彼は、地主にかわって民衆を支配する富農についての貴重な情報を入手したのだった。〈略〉プリュジョフは話をしている相手から学ぶべきことを見出せない場合には、自分の方から彼らに、純粹に国家的見地に立って、社会全体の状況を知らせるとともに、いかなる未開人といえども一定の社会制度なくしては存在しえぬこと、もっ

とも進歩的国家とは何よりも先ず社会的基盤のしっかりした国家であることなどを教えたのだった。その見返りとしてプリュジョフは、お茶や時にはウォッカをふるまわれたり（彼は1日に銀貨10～15コペイカ以上持ち歩かなかった）、また時には、将来、例えば彼を通して森を売るといったような何かしらの恩恵にあずかろうとの期待から、食事まで御馳走してもらうこともあった。彼は夜遅くまでそこにいて、それからぐったりした状態で帰宅するのだった。多少の例外を除けば、ほぼ丸一年の間、そうした毎日が繰返されたのであった。

(стр. 23～24)

彼はもはや、たんに民衆と交わり、彼らから情報を収集する者ではなかった。自ら進んで民衆に働きかけ、彼らに「知らせ」「教える」者たらんとしているのだ。だが彼は「孤独な」アジテーターであった。<sup>26</sup> 孤独である限り、彼の名が歴史上「革命家」として知られることはなかっただろう。歴史が彼に「革命家」の称号を与えるためには、「孤独な」という形容が除去されねばならなかった。その除去に手を貸したのは生活の困窮である。飢餓は彼に蔵書の売却を強いるとともに、彼を革命的政治結社に近づけたのだった。

1868年の中頃、鉄道の線路監督の仕事を辞して以来、生産的行為を何ひとつした形跡の見られぬプリュジョフが、妻とふたりの生活を続けていたこと自体謎だが、今それはさておき、餓死が寸前にまで迫った時、彼に残された唯一の武器は、爪に火をともし命を削るような思いで買いためた蔵書であった。蔵書の売却は彼にとって、漁師から海を、農民から大地をとりあげるに似たほとんど致命的な意味を持っていたが、1868年末彼は遂に「声」紙に蔵書売却の広告を出し、一方でO.Φ.ミルレルを介してペテルブルク大学の教授達と交渉したりもする。しかし、断腸の思いの中にこめられた期待はあっさりと裏切られる。「教授たちの多くが、カタログをためつながめつしていたが、誰も買おうとはしなかった。歴史文献は市場価値が低かったのだ」(стр. 25)と彼は書いている。だが、ここで見逃してならぬのは、彼が教授たちとの交渉を通じてA. A. チェルケソフと面識を得たということである。

これは決定的な出来事であった。何故ならチェルケソフの経営する本屋は、ネチャーエフ党の中心のアジトのひとつだったからである。ペテルブルクでの蔵書売却交渉も失敗に帰し、なすべきことと言えはモスクワのチェルケソフの支店（本店はペテルブルク）に入りびたって暇潰しをするだけだったプ  
ルィジョフが、支店を委されていた П.Г. ウスペンスキーを始め、一連のネチャーエフゆかりの人々との出会いの中で、孤独に育んだ革命への志向に組織的かつ具体的展望を付与していったのは必然の成行だったと言わねばならない。そして、そうであればこそ、1869年9月ネチャーエフが彼のもとを訪れ、秘密結社への参加を要請した時、彼が初対面の革命家の申し出に二の足を踏むことは恐らくなかったのである。一過的な青春の情熱にほだされたのではなかった。彼はその時、不惑の年を越えていたのだ。

ここに「革命家」プ  
ルィジョフの活動が始まる。だがそれは、ネチャーエフ率いる秘密結社「人民の裁き」<sup>ナロードナヤ・ラスプラーヴァ</sup>がいわゆる「五人組」によって組織され、彼が結社の先頭に立つ初期「五人組」のひとりだったことによって、彼の人生最大の転機を織りなすドラマの幕開けでもあったのだ。何故ならプ  
ルィジョフは、同じ「五人組」の大学生 И. イワノフを、彼を裏切者と断ずるネチャーエフの指示に基いて、ネチャーエフ及び「五人組」の他の三人とともに処刑せざるを得なくなるからである。いや、逮捕、裁判、流刑は、「革命家」の宿命であって、プ  
ルィジョフの運命も、彼が「孤独」から「組織」に移行しようとした時に決定されていたと言うべきだろうか。いずれにしても次に語られねばならないのは、「革命家」プ  
ルィジョフのネチャーエフあるいはネチャーエフ党との関連における活動についてであるが、ここでは、その準備も紙面もないので割愛し、以下とりあえず、彼の逮捕から裁判、それに判決からシベリヤ流刑、そして死までを粗述して「略伝」をとにかく完結させることにしよう。

## 5

「人民の裁き」が脱退する И. イワノフに対して下した宣告は、「死」で

あった。1869年11月21日、処刑は遂行される。処刑に加わったのは、ネチャーエフは勿論、「五人組」のメンバーたち——即ち、プリージョフ、ウスペンスキー、П. ニコラエフ、A. クズネツォフ——四人であった。四日後の11月25日、ペトロフスキー公園の池に投げこまれたイワノフの死体が発見される。この事件の発覚は、以前から目を光らせていた第三部に、一挙に「人民の裁き」の核心へと迫る端緒を与えることになる。翌26日、第三部は、1869年初めの学生運動の担い手たちからの糸と、イワノフからの糸が交差する人物としてウスペンスキーの部屋の家宅捜索を行ない、彼を逮捕するとともに莫大な収獲を得たのである。翌27日にはプリージョフも家宅捜索をうける。この時は、危険文書焼却などの事前工作によって一旦逮捕を免れる。しかし、12月3日、二度目の家宅捜索において、捜索自体は徒労に終わったが、既に拘留されていたウスペンスキーを筆頭に他の「人民の裁き」のメンバーたちから押収した証拠物件を決め手に、第三部は遂にプリージョフを逮捕したのだった。

1871年7月1日、長い取調べの後、裁判は開かれた。政府転覆の意図をもった共謀に対するこの裁判は、被告数実に87人、検事局の用意した起訴状12通という大がかりなものだった。プリージョフは、11人の最重要国事犯のひとりとして、第1起訴状にリストアップされていたが、彼とウスペンスキー、クズネツォフ、ニコラエフの四人については、加えてイワノフ殺害に関する告発もなされていた。同年7月15日、第1起訴状による裁判は終わる。プリージョフに下された判決は、一切の財産官位剥奪の上、12年間の徒刑、後シベリヤに永久追放というものだった。この判決は、ツァーリの裁量にその法的効力の発揮が委ねられたから、裁判関係者の誰の目にも健康状態の悪化が明らかだったプリージョフには大いに減刑の期待ができるものであった。しかし、プリージョフを待ちかまえていたのは、減刑どころか、さらなる苦痛と屈辱であった。1871年12月21日、彼はウスペンスキー、クズネツォフとともに、公開処刑場である馬<sup>コンナヤ・プローシチャチ</sup>市場の高台に連行されてゆくからである。聖書と十字架を手にした司祭が近づく。司祭は最後の祝福を与

## 永遠の失敗者（鈴木淳一）

え、十字架への接吻を促す。プリュジョフは先陣を切って、十字架への接吻を拒否し断固とした態度で処刑台に登る。護送部隊は四散し、兵士たちは捧げ銃の姿勢をとる。この時、裁判所の書記が厳かに判決文を読みあげ、続いて三人は処刑用の杭の所に連れてゆかれ、鎖についた鉄の輪に両手を固定した状態で30分ほど晒し者にされたのだった。やがて夜明けだった。広場に居合わせた H. E. デニケルは、後にこう回想している。

彼らはみんな太陽の登ってくる方を見つめていたが、と遂に太陽は灰色の雲のかげから顔を出し、悲惨な光景を照らし出したのだった。<sup>27</sup>

1872年1月14日、プリュジョフは一旦ヴィイルクーツクに移送。そこにしばらく滞在した後、徒刑地であるザバイカリスカヤ地方のペトロフスキー製鉄所に配属されている。この間の詳細についても、また1881年の8月の末か9月の初めに徒刑を終了までの「死の家」における彼の言動についても、情報は皆無に等しい。彼は、さながら生きながらに葬られた人であった。だが、かつて6項目にわたって繰広げられた彼の情熱は、「死の家」でいささかなりとも衰えた訳ではなかった。約11年の沈黙を経て発せられる彼の肉声があることを如実に物語っている。徒刑終了寸前の1881年8月20日、54才の彼は旧友 H. M. ストロジェンコに次のように書き送るのである。

町に出て、モスクワから自分の旧作を受けとったら、以前とは較べものにならないほど成長した私は、コトリャレフスキーが百年かかってもなしえないような著作に即刻着手するでしょう。（原文改行）現在のところ学問については、諺で言う「片足を棺桶につっこみながら、もう片足はびくつかせている」といった塩梅です。（срр. 374）

情熱がどれほどの原稿を書かせたかはわからない。ただ、シベリヤ時代に彼が完成させた作品として現存するのは、わずかに『シベリヤのニコラ』（1881）『シベリヤについての覚え書き』（1882）の二作に過ぎない。ペンで生活を支えることなど到底無理な相談であった。弟やあるいは少しならスト

ロジェンコからの援助はあったことだろう。しかし、年齢50も半ばを過ぎた不遇な老人は、情熱がからまわりを続ける中、僻遠の地で唯一の支柱であった妻が病魔に負けた時、自らの寿命を定めたのであった。プリュジョフの最後の言葉——1884年7月4日ストロジェンコ宛書簡の追伸には(стр. 381), 「既に妻の墓の傍に自分のも掘ってもらった」(стр. 380)彼の死に対する諦念を聞き取ることができよう。こうして彼は、1885年7月27日この世を去る。訃報が知人あるいは親類縁者たちのもとに届くのは、やっと死後半年も過ぎた頃である。1886年2月13日、ストロジェンコにシベリヤからほぼ1年半ぶりに配達された手紙には、ペトロフスキー製鉄所の所長И.Я. アニキンのそっけなくも短い文面があった。

イワン・ガヴリロヴィチは奥さんの死後、かなり酒に溺れておりました、彼を責めるつもりで申しあげるのではありませんが、それが彼の死の最たる原因でした。彼は健康だった頃、毎日のように我家を訪れましたが、私の知る限り、晩年はほとんど何も書いてはいませんでした。死後、全部で約250ルーブリ相当の彼の家と最低限の所持品とが残されましたが、またあれこれの人に対する約300ルーブリの借金も残されました。彼の財産は全て警察に差押さえられていて、どう処分されるのか私にはわかりません。ただ本と書類は現在全部私の手元にあるのですが、まだそれらを分類し目録を作る暇がありません。あなたを彼の生活の細々としたことでわずらわせようなどとは露思いませんが、ここに認め<sup>したた</sup>ましたことについてはどうか彼の親類縁者の方々にお伝え下さいますように。(стр. 361)

今年は、フレブニコフ生誕百年であり、またプリュジョフの死後百年でもある。1966年に季刊誌「ロシア文学」第3号に、プリュジョフの手稿、書簡が大量に発見された旨の記事があり、「革命家の新たに発見された手稿(全部で1,500ページ余り)は、60~80年代の社会的・政治的思想に関する我々の理解を深める手助けとなるだろう」<sup>28</sup>と結ばれているが、できるだけ早い

機会に彼の全集が編まれ、彼の全貌が明らかにされることを文学の側からも望みたいものである。

（1985年10月）

〈注〉

1. Памяти Н. И. Стороженко, М., 1909, стр. 57.
2. Ф. М. Достоевский, Полное собрание сочинений в 30 томах, Л., 1972~, т. 10, стр. 302~303.
3. Ф. М. Достоевский, Письма, тт. I-IV. Под ред. А. С. Долинина, М.-Л., 1928~1959, т. II, стр. 257.
4. М. С. Альтман, Прыжов и Достоевский. «Каторга и ссылка», кн. 8~9, М., 1931. стр. 58.
5. Там же.
6. В. С. Нечаева, Ранний Достоевский 1821~1849, М., 1979, стр. 20.
7. Ф. М. Достоевский в воспоминаниях современников, М., 1964, т. I, стр. 45~48.

ちなみにアンドレイはここで、両親の知人のひとりとして、イオアン・バルシェフ司祭の名を挙げ、二人の息子たちにも言及しているが、そのうちのセルゲイ・イワノヴィチ・バルシェフは、後にモスクワ大学総長にまでなる刑法学者で、やがて「ネチャーエフ裁判」の裏舞台において、プイジョフと敵対する男である。

8. ミハイル・アンドレーヴィチ・ドストエフスキーについて数言しておこう。彼は1789年ポドリヤ県の司祭の息子として生まれ、同県の神学校を卒業した後、父の跡を継いで聖職につくのを嫌い、1809年単身モスクワに上京、医科専門学校に入学。1812年、対仏戦争激化に伴い、大学を第4学年半ばにして軍医に徴用され、以来8年間、勤務地は何度か変わるがずっと軍役を続け、1820年12月に退役している。モスクワ陸軍病院の主任医師にまでなっていた彼が30才にもなんなんとして何故退役したのか不明だが、こうして1821年3月24日に、マリンスカヤ病院の外来婦人科の医師に任じられることになるのである。1813年のことだが、彼もまたボロヂノにいたことがあるのは（ボロヂノ歩兵連隊）、ガヴリール・ザハロヴィチ・プイジョフとの関係を考える時興味深い。
9. ドストエフスキーがペトラシェフスキーの主宰する革命結社との関連でペトロパヴロフスカヤ要塞に収監されたのは、1849年4月のことであり、プイジョフがネチャーエフ事件に連座して、同要塞に監禁されるのは、1870年5月のことである。ドストエフスキーが、そして、1850~1854年の4年間シベリヤで徒刑に服し、以後兵役を経てペテルブルクに帰還し、完全に作家活動に復帰するのは1860年のことである。
10. Ф. М. Достоевский в воспоминаниях современников, М., 1964, т. I, стр. 40~41.

- 11.(a) Творчество Достоевского 1821-1881-1921. Под ред. Л. П. Гроссмана, Одесса, 1921, стр. 83.
  - (б) Л. П. Гроссман, Путь Достоевского, Л., 1924, стр. 18.
  - (в) レオニード・グロスман『ドストエフスキー』北垣信行訳, 筑摩. 2~5頁.
12. В. А. Никитенко, Дневник, СПб. 1904, т. I, стр. 380~381.
13. この論文は, 1868年にペルブルク検閲委員会で不許可となり, そのまま没収されてしまったものだが, 1922年に Ю. Г. Оксманによって発見され, И. Г. Прыжов. Оперки, Статьи, Письма, М.-Л., 1934 (стр. 285~312) に初めて発表された。ちなみに同書では『混乱の時代とモスクワ大学のこそ泥たち』という題でまとめられたセクション内に, 同名の論文の他に『ペテルブルクとモスクワ』『10月4日のモスクワ』といった論文も収められているが, これらもまたプイジョフの大学通ぶりを示すものである。
14. プイジョフは妻についてこう書いている——「……ある娘が大きな支えとなってくれた。私はその娘と結婚した。彼女はウクライナのマルトス家の出で, プイジョフがそれまでに会ったことのないような稀に見る女性だった」И. Г. Прыжов. Очерки, Статьи, Письма, М.-Л., 1934, стр. 23.
15. Н. И. Стrojенкоの公開講座が開かれたのは1864年5月のことで, それを絶賛したプイジョフの論文〈Лекции г. Стороженко о Шекспире〉は〈Московские губернские ведомости〉(1864, № 3,) に発表された。余談だが, プイジョフの論文の影響でСтrojенкоは, 後に高名なシェークスピア学者となる息子を, イギリスに留学させようと決心したらしい。
16. Памяти Н. И. Стороженко, М., 1909, стр. 156~157.
17. Там же.
18. 正式な題名は——История кабаков в России в связи с историей русского народа (ロシヤ民衆の歴史との関連におけるロシヤの居酒屋の歴史)。
19. Н. А. Лейкин в его воспоминаниях и переписке, СПб., 1907, стр. 194.
20. この作品は検閲で不許可となった後, 原稿はプイジョフに返却されたのだが, それも結局プイジョフ自身の手で焼却されて現存しない。
21. 初出の時の題名は——26 московских юродивых, пророков, дур и дураков (26人のモスクワのユローヂヴィ, 予言者, 馬鹿女, 馬鹿男)だったが, 単行本になった時の題名は——26 московских лже-пророков, лже-юродивых, дур и дураков (26人のモスクワの偽予言者, 偽ユローヂヴィ, 馬鹿女, 馬鹿男)となっている。内容的に見ても, またプイジョフの他所での発言から考えても, この「лже (偽)」という文字は, プイジョフの意志とは無関係に冠せられたものと推察しうる。
22. プイジョフは「6」といって「5」しか提示しておらず, (二)ロシヤにおける貧困の歴史の項は, 実はこの箇所から抜け落ちているのだが, 同様の内容が語られている1867年10月の М. М. Сташуревич宛書簡 (стр. 371) と照合した上で挿入したものである。



23. С. Ф. Либрович, На книжном посту; воспоминания, записки, документы, Петроград, 1916, стр. 58.
24. これは、『居酒屋（Корчма）』という論文で、1866年に〈Руссий архив〉№ 7に掲載された。
25. 1867年10月の М. М. Сташуревич宛書簡参照のこと。И. Г. Прыжов. Очерки, Статьи, Письма, М.-Л., 1934, стр. 371.
26. 「アジテーター」と言ったが、プルイジョフが以前に、アジ行為に一切無関心だったという訳ではない。例えば彼は、1861年に父親の故郷スレドニューヴォ村を訪れた際、既に、農民たちを啓蒙し、彼らに現状を認識させようとしたのだった。この訪問を土台に書きあげた論文の中で、彼はこう書いている——「民衆とともにうっとり水を眺め、堤防もろとも我々を流しさることのできるその力に驚きながら〈略〉私は、その力がひとつひとつばらばらな滴に分割されるといかに弱いものか、またそうした滴が海のようにひとかたまりに和合した時には何をなしうるか、ということの説明した」（『村から（Из деревни）』——И. Г. Прыжов, Очерки, Статьи, Письма, М.-Л., 1934, стр. 229）
27. Воспоминания И. Е. Деникера, 〈Каторга и ссылка〉 кн. 4, М., 1924, стр. 33.

ちなみに、ここですぐ思い出すのは、ドストエフスキーもまた1849年12月22日セミョーノフスキー練兵場で同様の経験をしているということである。このデニケルの言葉も、『白痴』1編5章でムイシキンが銃殺刑の宣告を受けた20分後に特赦の勅令で死刑を免がれた男から聞いた話として語る次のような部分に通じるものが感じられる——「彼は、くいいるように屋根と、屋根に照り返る光を見つめながら、その光から目をそらすことができなかつたことを覚えていました。彼には、それらの光が彼の新しい自然であり、三分後にはどうやってかはわからないがとにかくそれらの光ととけあってしまうように思えたのだそうです」（Ф. М. Достоевский, Полное собрание сочинений в 30 томах, Л., 1972~, т. 8, стр. 52.）

28. И. Трофимов, Неизвестные рукописи ученого-революционера. 〈Русская литература〉, 1966, № 3, стр. 161.

\* 尚、特に「注」に組み入れなかったが、М. С. Альтман, Иван Гаврилович Прыжов. 〈Каторга и ссылка〉 кн. 6, М., 1932, стр. 37~118. も多いに利用した。